

# 養護教諭のライフストーリー研究

瓜田史花

本論は、13人の養護教諭にインタビューを行い、その経験をライフストーリー法を用いて分析した論文である。ここでは要約という形で、論文の一部を紹介していく。

## 1. 背景

養護教諭は、明治時代に学校看護婦という名称で、学校医の補助としてトラホームの治療に携わったことから始まる。その後養護訓導、養護教諭と名称は変わり、執務の内容も変化してきた。

## 2. 目的と方法

本研究では、養護教諭が自分の経験の中で何を切り出し、どのような経験をきっかけに成長していったかをエピソード分析し、養護教諭の社会化の過程を考察する。

方法として、人々の経験の豊かさや主観的現実をすくいあげるため、ライフストーリー法を用いことにする。

ライフストーリー・インタビューは、人生や過去の経験をインタビューすることによって、対象者のアイデンティティや社会を理解するための質的調査法の一つである。(中川、2009) 桜井 (2005) は、「ライフストーリーのもっとも重要な特質のひとつは、〈過去〉の出来事の経験が〈現在〉のインタビューの場を通して語られることで、リアリティのある過去の出来事がつくられる、ということです。」とライフストーリーの重要性を指摘している。

## 3. ライフストーリーの聞き取り調査について

調査は、2011年5月から9月までの期間に、対象者の職場や自宅、または電話で、個別に聞き取り調査を行った。質問の内容は、①育った家の環境・家族構成②養護教諭志望の動機③実習での経験④働いてからの印象的な出来事⑤結婚・出産後の変化などである。

対象者は、青森県弘前市の小・中学校に勤務する現役養護教諭13名で、20代から60代までの女性である。今回はそれぞれの経験を、新任期、中堅期、ベテラン期と分け、それぞれについて考察していく。

まず、1校目を新任期とし、中堅期とベテラン期の境目は、インタビューの中で本人が、「大人になった」「自信がついた」など、ライフイベントに影響を与える発言をしたところとする。そのような発言がない場合は、「困難を乗り越えた」など語りから判断して分けた。

#### 4. 結果

新任期では、理想の養護教諭像とのギャップ、学生時代に行った実習とのギャップが見られた。そのようなギャップを乗り越え、子供達・周りの職員との関わりから、自身の原点となる時期でもあった。そして、何気ない生徒との関わりに喜びを見出し、様々な人からの学びが多い時代であった。

中堅期は、たくさんの子供や大人と接する場面があった。担任を持たない養護教諭だからこそ、何気ないことに喜びを感じ、自分のことを覚えていてくれた生徒がいることを嬉しく思っていた。そして、前の学校での経験を生かした指導、実践を行い、思うように結果が出たことに対する喜びも生まれた。しかし、雑用以外の仕事で戸惑いを感じることもあり、養護教諭らしい実践ができたことで生じる悔しさや喜びも見られた。ネットワークの広がりも見られ、他の養護教諭との情報交換や保健室登校児・子供達の悩みに触れたことによって、子供達を気にする語りが出てきた。中堅期の特徴として、出産を経験した先生が多く、出産や経験年数から、「大人になった」「年相応になった」などという自身の評価も多く語られた。このように、中堅期からベテラン期に移る際に、何かしらのイベントがあり、自ら学び、経験を経て一人前になったと評価できるようになっている。出産からは、子供に対する感情の変化だけでなく、親の気持ちを理解することで、「保健だよりの作り方が変わった」、「性教育がしなくなった」など、自身の仕事にまで影響していた。

ベテラン期は、子供についての語りが一番多く、子供のちょっとした変化を感じ取り、年々増えている荒れた生徒や不登校児とも一生懸命関わっていた。仕事内容では、今まで経験してきたことを活かした実践が見られ、子供との関わりが自身の実践の向上にも繋がっていた。同様に、自身の実践の成功が、子供達の成長にもなったという二重の喜びも語られた。しかし、保護者や子供が信頼し、担任教師のことを相談しに来ることもあり、そのことで担任との板ばさみも起きていた。

新任期・中堅期・ベテラン期に共通している経験として、5人の対象者から「引け目」からの「吹っ切れ」が語られた。ここでは、AさんとBさんの語りを紹介する。

##### A先生：4校目（中堅期）での失敗経験

A「ある程度年数もたってるし、養護教諭として私はこんなことをやっているんだということを、なんかしなきゃいけないような。他の先生達は授業をやって忙しくて、で養護教諭の仕事っていうのは、はたから見ればどう思われているんだろうとかかっていうことがすごく気になる時期だったんです。これやってみたいなっていうようなことを思い、今のお子さんの栄養指導とか清潔検査であるとか。全国大会とか学習大会とか行って雑誌見たりして、これいいな、私もやりたいなみたいな、やったらどうかなっていうふうにしてやっていた時期だったと私は思うんです。」

A先生は他の先生からの目が気になる時期があった。そのような時期に、自ら何か実践をしたいと考え、大会に参加したり雑誌を見たりして計画していた。

A「ある日ね、清潔検査って保健委員会の子供達がいる、○とか×とかやって。それを材料にして子供達に罰点するような場面を見たことがあって。自分でね、これをやったら子供達が、ちり紙ハンカチと

か身に付けられて、きっと清潔度が上がるだろうと。単純な発想ですよ。ただ、そのために一人でも二人でも心が傷ついたり、私のやってることってなんだろうって思っちゃったんですね。すごくショックだったです。子供を傷つけないように、傷ついた子供を守りたいという気持ちの一方で、それが私の思惑と逆の子供を傷つけたりマイナス評価の材料になったりしてるっていうことは、自分の中ではとても許せなくて。あ、私は一体何のためにやっけたのかって。これもやってる方が仕事やってる、これもやってるあれもやってるっていうための一つとしてやっていたんじゃないかって私は思ったんです。でそれを覆すだけの強い動機が、ほんとにこれが子供達のためになるのかっていうことが見当たらず。それがやる自分が何かをやってるって言いたいがための仕事であるのかどうかってことはね、私は仕事してないとか暇だとか思われてもいい。そういう、やっぱり子供のことを中心にして仕事しようって思ったのがその P 小学校のその時代だったんですね、そのことをうん。吹っ切れたんですその時に。そして、保健室に来る子供を中心にして、その対応を大事にして私はまず仕事をしよう子供と向き合うことが仕事だと思ってやろうと思ったの。」

A 先生は子供達の清潔度が上がると思い行った清潔検査によって、罰を受け傷ついた子供がいるという事実を知って大きなショックを受けた。自分は一体なんのために仕事をしているのかと自らを振り返り吹っ切れ、仕事をしている姿を見せるためではなく、子供達のために仕事をしようと思った。

#### B 先生：6 校目（ベテラン期）のエピソード

B 「養教っていうのは学校に一人なので、先生達と同じ忙しい時間時期が違うんですよ。先生達は学期末に通信簿つけて忙しい、あたしたちは4月の健康診断で忙しい。でやっぱしおんなじ仕事してるわけじゃないので、うん。養教は暇だとか、そういうふうな目で授業にいかないし、目で見られた部分があったし。私もそれをこう引け目かな、なんかそういうふうに見てた部分もあるし。で生徒が『先生暇だなー』って言われると、『ん先生だっきや忙しい。あれもやねばまねしこれもやねばまねし』って、こうむきになったのがあるし。うん、でもそこらへん Q（学校の名前）の2回目からね『先生暇だ』なったら『うん先生暇だはんでいつ来てもいいよ』って。うんそういうふうに見えるようになった。年だんだんなって。」  
<うんうん。どうしてここからそう変わったんですかね>

B 「ん～たぶん年のせいだと（笑）」

B 先生は、担任を持つ先生から、自分が授業に行かないことなどから暇だと思われていることが「引け目」であったと語った。その「引け目」から、生徒にも「忙しい」とアピールしている。しかし6校目になり、自身も年相応になったということから、吹っ切れ、自分は暇だと言えるようになっていく。

中堅期・ベテラン期は子供達の変化に気づき始め、自ら何かしようと考え奮闘する時期である。そして仕事にも慣れてきたころ、周りをよく見られるようになると同時に周りの教師の目を気にするようになる。この「引け目」は、「他の先生達」と語られているように、担任を持っている教師と比べての「引け目」である。これは、学校に一人（または二人）しかいなく、他と同じ業務ではない養護教諭独自の感情であると考えられる。養護教諭は保健室にすることが多く、授業もないため、他の担任教師からその仕事ぶりを見られることは少な

い。担任教師は通信簿を書く時期など、ある時期ごとに職員室で共通した忙しさがあるが、養護教諭はその忙しさを分かち合うことができない。重ねて掃除や花壇作り、お茶くみなどの雑用などもする養護教諭は、自分の仕事とはなんなのだろうと悩み、「引け目」が発生したと考えられる。

しかし、どの養護教諭も他者からの言葉や自身の経験から、「引け目」を克服していた。

A先生、B先生ともに「引け目」を感じたあと、「吹っ切れ」ている。A先生は清潔検査での出来事によって「吹っ切れ」ており、B先生は「年相応になったから」と語った。「引け目」を克服した経験は人それぞれであるが、他者の言葉や行動による克服、自身の実践や経験から自然に自分の中で克服できた場合の2つのパターンがあった。

A先生は、「吹っ切れ」たあと、「自分のためではなく子供のためになる仕事をしよう」という語りから、「吹っ切れ」たあとは、自身の養護教諭としてのスタイルの確立に繋がっていた。

## 5. 考察

紹介した養護教諭の成長プロセスは、新任時代のギャップから抜け出し、中堅期で今までの経験から自分の実践を工夫し、新たな実践に取り組む、生徒の悩みを聞いて解決に導くなど、養護教諭として必要な学ぶ姿勢を身につけていた。そして、周りの担任教師に対する「引け目」を克服し、子どものために仕事をするという新たな養護教諭としてのアイデンティティを獲得していた。これは、斎藤・菊地（1990）が述べる、「個人が社会的になるためには、社会の成員としての資格を身につけ、発達のために克服しておくべき職業的発達課題に取り組み、その結果により職業的な自我を形成することが欠かせない」という職業社会化の過程と一致している。

養護教諭は、今日も一人ひとり違い、年々変化する子供達と向き合っている。「一人前っという感覚はない。この仕事は常に学びがないといけない仕事。子供が変わるし、判断がすぐできる時もあるけど、100%じゃない。」と養護教諭達が言うように、新任期・中堅期・ベテラン期で常に学ぶことで、力量形成を行っていた。

### 引用文献（要約部分のみ）

- (1) 菊池章夫、斎藤耕二、1990、『社会化の心理学ハンドブックー人間形成と社会と文化』、川島書店
- (2) 小林多寿子・桜井厚編、2005、『ライフストーリー・インタビュー 質的研究入門』、せりか書房
- (3) 中川恵里子、2009、『ライフストーリー・インタビューの世代間学習としての可能性』、「生涯学習基盤経営 第34号 2009年度」